

ダニエル書 - 第四十三号

聖書の預言における「荒らす憎むべきもの」の象徴性を解き明かす

Jeff Pippenger

2024-01-07

538年に教皇権が台頭するのを抑えていた力を異教ローマであるとパウロが特定したことは、ウィリアム・ミラーが認めた証拠となり、ダニエル書における“the daily”が異教を表すことを確立した。ウィリアム・ミラーの枠組みは、まず異教、次いで教皇制という、荒廃をもたらす二つの権力に基づいていた。その枠組みを裏づけるうえでミラーが得た最も重要な発見は、テサロニケ人への第二の手紙2章に記されたパウロの証言であり、そこでパウロは、神の宮に座して自分を神であると示す「不法の人」が現れるために、異教ローマによってもたらされていた教皇権への抑制が取り除かれることを明らかにしている。

ダニエル書では、異教を表す「常なるもの」の象徴の後には、たとえそれが「荒らす背き」としてであれ「荒らす憎むべき者」としてであれ、いつも教皇権の象徴が続く。ところが、紀元66年から70年の3年半に起きたエルサレムの包囲と破壊に関して、キリストがキリスト者たちに与えた警告において、キリストは「預言者ダニエルによって語られた『荒らす憎むべき者』」を、エルサレムにいたキリスト者たちが直ちに逃げるべきしるしとして言及した。歴史は、そのしるしが教皇ローマの象徴ではなく、異教ローマの象徴であったことを示している。包囲と破壊を免れるためには、そのしるしを忠実な者たちが認識する必要があった。「預言者ダニエルによって語られた『荒らす憎むべき者』」は、異教ローマの象徴なのか、それとも教皇ローマの象徴なのか。

それゆえ、あなたがたが、預言者ダニエルによって語られた荒廃をもたらす忌むべきものが聖なる場所に立つのを見たとき（読む者は悟れ）、そのとき、ユダヤにいる者たちは山へ逃げなさい。屋上にいる者は、家の中から何かを取り出そうとして降りてはならない。畑にいる者も、衣服を取りに戻ってはならない。その日には、身重の女と乳飲み子に乳を飲ませている女はわざわざいだ。ただ、あなたがたの逃避が冬や安息日にならないよう祈りなさい。というのも、そのときには、世の初めから今に至るまでなかったような、そしてこれからも決して起こらないほどの大きな患難があるからである。もしその日々が短くされなければ、肉なる者はひとりも救われない。しかし、選ばれた者たちのために、その日々は短くされる。マタイによる福音書 24:15-22。

ホワイト夫人は、西暦66年から70年にかけてのエルサレム滅亡の歴史において、この警告がどのように成就したかを述べ、ローマ軍の旗、すなわち軍旗が、なおエルサレムにいたキリスト者にとって退避すべきしるしであったと指摘している。では、「預言者ダニエルが語った『荒らす憎むべきもの』」は、異教ローマなのか、それともミラーが自らの枠組みの基礎とした教皇ローマなのか。

ウィリアム・ミラーは、ローマの二つの形態（異教ローマ、のち教皇ローマ）を理解するよう導かれたが、彼は自らが生きた歴史によって、両者を一つの王国として扱わざるを得なかった。もちろん、それらは一つの王国であると同時に、連続する二つの王国も表

している。1798年の預言史に強いられて、ミラーはローマを主として一つの王国として扱わざるを得なかった。1798年当時、ミラーはキリストの再臨がおよそ25年先にあると信じていた。彼は、教皇ローマが1798年に致命的な傷を受けたことを十分承知していた。ミラーにとっては、教皇ローマに続く他の地上の王国は存在しなかった。というのも、キリストがまさに再臨しようとしていたからである。

ミラーの時代において、彼はダニエル書第2章の像が四つの地上の王国を表していると理解した。なぜなら、それはダニエルがそのように証言しているからである。

そして第四の王国は鉄のように強くなる。鉄はすべてのものを粉々に打ち砕き、従わせるからである。鉄がこれらすべてを打ち砕くように、その国も粉々に打ち砕き、踏みしめるであろう。また、あなたが見た足とその指は、一部が陶工の粘土で、一部が鉄であったが、その王国は分かたれる。しかしその中には鉄の強さがいくぶんある。あなたが鉄がぬかるみの粘土と混ざっているのを見たからである。ダニエル書 2:40、41。

ミラーは、王国は四つしかなく、第四にして最後の王国はローマであり、歴史から、それが異教ローマの後に教皇ローマが来るものだと知っていた。ミラーにとって、ダニエルの言葉どおり、第四の王国は「分かれている」ものだったが、彼にとってその分裂は、ローマの王国の文字通りの側面と霊的な側面の区別を表すにすぎなかった。彼は正しかったが、彼の理解は限られていた。

ミラーは、異教ローマと教皇ローマの区別が、パウロがそれを明らかにするために立てられた区分に基づくものであることを理解していなかった。パウロ（およびバプテスマのヨハネ）は、十字架の時代に、文字どおりのものが霊的なものへと移行するはずであることを示した。その理解がなかったため、ミラーはローマは本質的に二つの段階を持つ一つの王国であると受け入れざるを得なかった。そしてもちろん、彼は正しかった（しかし限定的だった）。彼は、霊的ローマが文字どおりのバビロンによって表されていることを見抜けなかった。というのも、霊的ローマ（教皇制）はまた霊的バビロンでもあるからである。

ダニエル書2章における四つの王国の第一としての文字どおりのバビロンは、第四の王国の型となる。というのも、最初のものは常に最後のものの型となるからである。異教ローマはバビロンによって象徴されていたが、異教ローマもバビロンも、ともに霊的ローマ（ローマ教皇制）を象徴していた。したがって、教皇制は第五の王国であり、それはバビロンによって表されていた。これが、ホワイト夫人が、文字どおりのイスラエルがバビロンで70年間捕囚となったことを、霊的イスラエルが霊的バビロンで1,260年間捕囚となったことと比較する基本的な理由である。

「地上の神の教会は、この長く容赦のない迫害の期間中、捕囚の期間にイスラエルの子らがバビロンで囚われていたのと同様に、まさしく捕囚の状態に置かれていた。」
『預言者と王たち』714ページ。

したがってミラーは、異教ローマをより具体的に指し示す預言の成就と、教皇ローマに関するそれとを互いに入れ替えて用いることに何の問題も感じなかった。これについてはこの先で例を挙げるが、ミラーが異教ローマと教皇ローマを一つの王国と見なしていた

と理解すれば、イエスが『預言者ダニエルによって語られた「荒らす憎むべき者」』に言及するのを異教ローマの成就として受け止めることにミラーが抵抗を覚えなかった理由が分かるし、同時にダニエル書における「荒らす憎むべき者」という表現を教皇ローマの象徴として理解していたことも理解できる。ミラーは荒らす三つの勢力を見抜くことができず、そのため彼の預言理解の枠組みは正確ではあったが限定的だった。

しかし、紀元66年における歴史的成就の食い違いを、どのように理解すべきでしょうか。すなわち、キリストの予言の成就として、異教ローマが神殿の聖域に軍旗を立てたことです。「預言者ダニエルによって語られた『荒らす憎むべき者』」は、異教ローマの象徴なのか、それとも教皇ローマの象徴なのか。そのジレンマの答えは、二つではなく三つの荒廃させる勢力を認めれば、かなり単純になります。まず、キリストがエルサレムの滅亡を予告されたことの成就に関するホワイト夫人の解説から始めるべきです。

ユダヤ人がキリストを十字架につけたことは、エルサレムの滅亡を招いた。カルバリーで流された血は、彼らをこの世でも来たるべき世でも滅びへと沈めた重しであった。同様に、神の恵みを拒む者たちに裁きが下る大いなる終わりの日にも、そうなる。彼らのつまずきの岩であるキリストは、そのとき彼らには復讐の山として現れるであろう。義人にとってはいのちである御顔の栄光も、悪しき者にとっては焼き尽くす火となる。拒まれた愛、侮られた恵みのゆえに、罪人は滅ぼされる。

数多くの警えと繰り返しの警告によって、イエスは、神の御子を拒むことがユダヤ人にもたらす結果を示された。これらの言葉において、主は、あらゆる時代においてご自分を贖い主として受け入れることを拒むすべての者に語りかけておられた。すべての警告は彼らのためである。冒瀆された神殿、不従順な息子、悪しき農夫たち、軽蔑する建築者たち——これらに対応するものは、すべての罪人の経験に見いだされる。その人が悔い改めないなら、彼らが予示した滅びはその人自身のものとなる。The Desire of Ages, 600.

パウロは、文字どおりから霊的への移行が十字架の時期に起こったと指摘しており、エルサレムの滅亡が十字架と直接結びついていることにも注意すべきである。文字どおりのエルサレムの滅亡は、最初には文字どおりのバビロンによって、最後には文字どおりのローマによって成し遂げられた。というのも、イエスは常に初めに終わりを示されるからである。バビロンの異教的権力から始まった聖所と軍勢の踏みにじりは、ローマの異教的権力で終わった。

霊的エルサレムの霊的蹂躪は教皇ローマによって行われ、文字通りの蹂躪と霊的な蹂躪というその二つの時期はいずれも、第三の荒廃させる勢力（ローマに関しては現代ローマと呼ばれる）による神の民の蹂躪を予表している。

神の民をそれぞれ迫害する荒廃させる三つの勢力がある。異教の竜、続いてカトリックを表す海の獣、さらにその後アメリカ合衆国（偽預言者）を表す地の獣が続く。異教は、文字どおりのイスラエルを踏みにじったさまざまな異教の諸勢力として表されていた。次に教皇制が538年から1798年までの千二百六十年にわたり霊的イスラエルを踏みにじった。竜と獣と偽預言者の三者連合は現代ローマであり、日曜法の危機の「時」においても神の民を踏みにじる。竜、獣、偽預言者という三つの荒廃させる勢力は、異教ローマ、教皇

ローマ、現代ローマとしても表される。

黙示録17章においては、異教は最初の四人の王であり、第五の王はローマ教皇制であり、第六・第七・第八の王は現代ローマの三重連合である。

また、七人の王がいる。五人はすでに倒れ、一人は今いる。もう一人はまだ来ていない。彼が来るとき、短い間だけとどまらなければならない。かつていて今はいない獣は、八番目であり、七人に属する者で、やがて滅びに至る。ヨハネの黙示録 17章10、11節

ダニエル書2章に関して言えば、異教は、文字どおりのバビロンから文字どおりのローマまでの四つの王国全体を指す。霊的バビロンは教皇権（黄金の頭）であり、竜と獣と偽預言者（現代のローマ）から成る三者連合は、霊的メド・ペルシャ、霊的ギリシャ、そして致命的な傷が癒えた霊的ローマの三者連合によって表されている。

イエスが「預言者ダニエルによって語られた『荒らす憎むべきもの』」に言及されたとき、三つのローマそれぞれにおいてキリスト者が認識しなければならない特定の「しるし」を示しておられた。異教ローマ、教皇ローマ、そして近代ローマは、いずれも神の民を迫害する。その迫害は、聖所と軍勢を踏みにじることとして預言的に表されている。イエスは、その三つの迫害期それぞれに、その迫害が近づくことを知らせる警告を与えられた。ローマの權威の「しるし」が聖所に据えられたとき、エルサレムから逃げるべき時が来たのである。イエスは、ダニエルの「荒らす憎むべきもの」という表現を地上の権力の象徴として用いられたのではなく、キリスト者が認識すべきしるしの象徴として用いられたのである。

イエスは、耳を傾ける弟子たちに、背教したイスラエルに下るべき裁き、ことに、彼らがメシアを拒み、十字架につけたことに対する報復について宣言された。紛れもないしるしが、その恐るべき頂点に先立って現れるであろう。恐るべき時は、突然、すみやかにやって来るであろう。そして救い主はご自分の従う者たちに警告された。「それゆえ、預言者ダニエルによって語られた荒らす憎むべき者が聖なる場所に立つのを見たなら（読む者は悟れ）、そのとき、ユダヤにいる者は山へ逃げよ。」マタイ24:15, 16; ルカ21:20, 21。城壁の外に数スタディオンほど広がっていた聖なる地域に、ローマの偶像的な軍旗が立てられるとき、キリストの弟子たちは、逃れることによって安全を見いだすべきであった。その警告のしるしが見えたなら、逃れようとする者は、いささかも遅れてはならない。エルサレムそのものにおいても、ユダヤ全土においても、退避の合図には直ちに従わなければならなかった。たまたま屋上にいる者は、たとえ最も貴重な財宝を救おうとしても、家の中に降りてはならなかった。畑やぶどう園で働いている者は、真昼の暑さの中で労苦する間に脱いでおいた外衣を取りに戻る時間を取ってはならなかった。大いなる滅びに巻き込まれないために、ひとときもためらってはならない。『大いなる論争』25。

その箇所ではホワイト夫人は、「荒廃の忌むべきもの」を、神殿の聖なる地に立てられたローマ人の「偶像崇拝的な旗印」によって示された「紛れもないしるし」として特定している。イエスは「荒廃の忌むべきもの」を、異教ローマや教皇ローマのいずれの権力をも表すためではなく、「しるし」として用いられたのである。この「しるし」が神殿の聖なる地に据えられたとき、キリスト者たちは「全体的な破壊に巻き込まれないように」

エルサレムから逃れるべきであった。さらに同じ箇所の後半でホワイト夫人は、その破壊を示したキリストの預言には複数の成就があったことを明らかにしている。

救い主がエルサレムへの裁きの来臨について語られた預言は、なお別の成就を迎える。その恐るべき荒廃は、その成就のただかすかな影にすぎなかった。選ばれた都の運命のうちに、私たちは神のあわれみを退け、その律法を踏みにじった世の破滅を見ることができる。地が長い罪の世紀のあいだに目撃してきた人間の惨苦の記録は、なんと暗いことか。思うだに胸が悪くなり、心は萎える。天の権威を拒んだ結果は、実に恐るべきものであった。しかし、未来の啓示には、なお一層暗い光景が示されている。過去の記録——長い騒擾、鬭争、革命の連なり、すなわち「戦士の戦い……混乱した騒ぎと、血にまみれた衣」（イザヤ書9:5）——これらが、神の抑えとどめる御霊が悪しき者から完全に取り去られ、人間の情念とサタンの憤怒の噴出をもはや抑えとどめることのないあの日の恐怖に比べれば、いったい何であろうか。そのとき世界は、かつてないほどに、サタンの支配の結果を目の当たりにすることになる。

しかしその日には、エルサレム滅亡の時と同じように、神の民は救い出される。生ける者のうちに名を記されていると見いだされる者は皆。イザヤ書 4:3。キリストは、ご自身に忠実な者たちをみもとに集めるために、再び来られると宣言された。「そのとき、地上のすべての部族は嘆き、天の雲に乗って力と大いなる栄光をもって来られる人の子を見る。彼は大きなラッパの響きとともに御使いたちを遣わし、四方の風から、天の果てから果てまで、その選民たちを集めさせる。」マタイ 24:30, 31。そのとき、福音に従わない者たちは、その口の息によって滅ぼされ、その来臨の輝きによって滅びる。第二テサロニケ 2:8。昔のイスラエルのように、悪しき者たちは自らを滅ぼす。彼らは自分の不義によって倒れる。罪の生活によって、彼らは神との調和から大きく外れ、その本性は悪によってこれほどまでに墮落してしまったため、神の栄光の現れは彼らにとって焼き尽くす火となる。

人々は、キリストの言葉に込められた教訓をおろそかにしないよう、よく用心すべきである。主は弟子たちに、迫り来る滅びのしるしを与えてエルサレムの滅亡を前もって警告し、彼らが逃れられるようにされたが、同じように、世に対しても最終の滅びの日を警告し、その近づく徴を与えて、望む者はだれでも来たるべき御怒りから逃れられるようにしておられる。イエスはこう宣言された。「日と月と星にしるしが現れ、地上では諸国民に苦悩がある。」ルカ 21:25; マタイ 24:29; マルコ 13:24-26; 黙示録 6:12-17。この来臨の前兆を目にする者は、「それが近づき、戸口にまで来ていることを知りなさい。」マタイ

24:33。「だから目を覚ましていなさい。」これが主の戒めの言葉である。マルコ 13:35。この警告に耳を傾ける者は、あの日に不意を襲われることのないよう、暗闇の中に置き去りにされることはない。しかし、見張っていない者たちには、「主の日は夜の盗人のように来る。」第一テサロニケ 5:2-5。『大争闘』36、37。

ホワイト夫人がこれらの言葉を記したとき、エルサレムの滅びに関する将来の成就がなお残されていた。世の終わりに、現代のローマ（竜・獣・偽預言者）に対して下される応報の裁きは、霊的バビロンの最終的な没落を表している。しかし、霊的バビロン（教皇権）は1798年にすでに一度倒れた。エルサレムの滅びは、背教した教会に対する神の応報の裁きを象徴している。

紀元66年から70年までの三年半にわたるエルサレムの破壊は、世の終わりに現代のローマ（竜、獣、偽預言者）に下される神の応報的裁きによる滅びを象徴している。紀元66年から70年にかけて異教勢力によって行われたエルサレムの包囲と破壊は、正確に三年半続いた。

教皇制によってもたらされた霊的なエルサレムの包囲と滅亡は、538年から1798年に至るまで、預言的な三年半の期間続いた。これら二つの例は、現代のローマによって引き起こされる日曜法危機の「時」におけるエルサレムの包囲と滅亡を象徴している。三度のエルサレム滅亡のうち最後のものは、ダニエル書に描かれているように、逆転する。

ダニエル書は、バビロンがエルサレムを征服して破壊するところから始まり、バビロンの滅びとエルサレムの勝利で終わる。三つの戦いそれぞれにおいて、迫り来る戦争から逃げないようにキリスト教徒に告げるしるしが与えられた。紀元66年には、異教ローマの軍隊が神殿の聖なる場所に軍旗（戦旗）を立てたときであった。紀元538年には、「不法の人」が神の神殿（キリスト教会）に座し、自分を神であるかのように示して、その年のオルレアンの評議会で日曜令を制定したときであった。日曜遵守の強制は、教皇制が自らのキリスト教世界に対する権威の証拠だと見なしているものである。というのも、彼らは神の言葉（聖書）には日曜礼拝の根拠がないと（正しく）主張し、キリスト教において日曜日を礼拝日として制定したという事実こそ、彼らの異教的な伝統と慣習の権威が聖書よりも上位にあることの証拠だとするからである。

538年に、キリスト者たちはローマ教会から分離すべきであった。それは、ローマ教会が真にキリスト教会ではなかったからというだけでなく、神の教会の聖域に教皇権のしるしが置かれていたからでもある。ホワイト姉妹は、その歴史における分離の過程こそが、神の教会が千二百六十年のあいだ荒野へ逃れる期間の始まりであったと指摘している。

しかし、光の君主と暗黒の君主との間に交わりはなく、彼らに従う者たちの間にも交わりはありえない。キリスト者が、異教から半ば改宗したにすぎない者たちと結びつくことに同意したとき、彼らは真理からますます遠ざかる道に踏み出した。サタンは、これほど多くのキリストの信徒を欺くことに成功したことを勝ち誇った。彼はさらにこれらの者たちに強く力を及ぼし、神に真実であり続けた者たちを迫害するように仕向けた。かつてその擁護者であった者ほど、真のキリスト教信仰にいかに対抗するかをよく知っている者はいなかった。そして、これらの背教したキリスト者は、半ば異教の仲間たちと結託し、キリストの教理の最も本質的な点に矛先を向けて戦いを挑んだ。

忠実であろうとする者たちが、司祭服に身を隠して教会に持ち込まれた欺瞞と忌まわしいものに対して揺るがずに踏みとどまるには、必死の闘いを要した。聖書は信仰の規範として受け入れられなかった。宗教の自由の教義は異端と呼ばれ、その擁護者たちは憎まれ、弾圧された。

長く苛烈な闘争ののち、忠実な少数者は、背教の教会がなおも偽りと偶像礼拝から身を解き放つことを拒むなら、その教会との一切の結合を解消することを決意した。彼らは、神の言葉に従うためには分離が絶対に必要であると悟った。自らの魂を滅ぼしかねない誤謬を容認することも、子どもや孫たちの信仰を危うくするような模範を示

すことも、彼らにはできなかつた。平和と一致を確保するために、彼らは神への忠実さと両立するかぎりのあらゆる譲歩をいとわなかつた。しかし、原則を犠牲にして得られる平和は、あまりにも高価な代償であると感じた。もし一致が真理と義の妥協によってのみ確保されるのなら、むしろ相違があり、さらには戦いがあってもよい。『大争闘』45頁。

これらの考察は次回の記事で続けます。

永遠が私たちの前に広がっている。幕が上がろうとしている。私たち、厳粛で責任ある立場に置かれている者は、いったい何をしており、何を考えているのか。周囲で魂が滅びつつあるというのに、どうして自己中心的な安逸への愛着にしがみついているのか。私たちの心はすっかり無感覚になってしまったのか。他者の救いのために私たちが果たすべき務めがあることを、感じることも悟ることもできないのか。兄弟たちよ、あなたがたは、目があっても見ず、耳があっても聞かない者の類なのか。神が御心の知識をあなたがたにお与えになったのは、むなしいことだったのか。神があなたがたに幾度も幾度も警告を送られたのは、むなしかつたのか。この地上に起ころうとしていることに関する永遠の真理の宣言を、あなたがたは信じているのか。神の裁きが人々の上に迫っていると信じているのか。それでもなお、安逸に座し、怠惰で、不注意で、快樂を愛していられるのか。

今は、神の民がこの世に心を据えたり、この世に宝を蓄えたりしている時ではない。初期の弟子たちのように、私たちも荒涼とした寂しい場所に避難所を求めざるを得なくなる時は、遠くはない。ローマ軍によるエルサレム包囲がユダヤのキリスト者にとって退去の合図となったように、教皇の安息日を強制する布告においてわが国が権力を行使することは、私たちへの警告となるであろう。その時には、大都市を離れ、やがて小都市も離れて、山々の間の人里離れた場所にある隠棲の住まいへ移る備えをする時である。そして今、ここで高価な住まいを求めるのではなく、より良い国、すなわち天の国へ移る備えをすべきである。自己満足のために私たちの資産を費やすのではなく、儉約に努めるべきである。神から貸し与えられたすべての賜物は、世に警告を与えるにあたって神の栄光のために用いられるべきである。神は都市において、その同労者たちに行うべき働きを備えておられる。私たちの伝道地は維持されなければならない。この働きを成功裏に進めるには、少なからぬ出費を要する。人々を招いて、この時代の真理を聞いてもらうための礼拝堂が必要である。まさにこの目的のために、神はご自身の管理者たちに資本を託しておられる。この働きが妨げられることのないよう、あなたがたの財産を世の事業に縛りつけてはならない。神の大義の益となるよう自由に取り扱えるところに、あなたがたの資金を置きなさい。「あなたがたの宝を先に天に送っておきなさい。」『証言』第5巻、464ページ。